

新 防災 **あすに備える**

消防庁消防研究センター所長

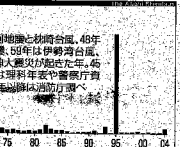
室崎 益輝さん

むらさき・よして。専門は「都市
行政・建築の防災・避難計画。神戸大
教授を経て04年4月から現職。中防
災会議専門委員会を移める。61歳



2006.6.10 朝日

いすは、高度成長期に生産力を上
げるため、農村が都市に労働力
を集めた結果として、農村部でお
年寄りを孤立させている。」「
——防災の視点で重要なことは
何ですか。
——命の大切さです。命が大切な
と、ことをどれどれ強調してい
るのか。例えば「サトウタウン」で小
学校がくる時、土地の一番安い
ところへ建てられたり、



守る教育です。」「
——日常生活しやすくなる防災の取
り組は、
——身の回りの環境、管理をする
習慣をつける、これが防災の基本
です。大量消費の時代を経験した
のも姿も使い捨て文化になっ
てしまった。昔は日曜全をしたり大
掃除をしたりして、いわば健康管
理をしていた。床を見て腐つて
たがって、塵埃を払い、いたら床が
つがって、いらないとか気がいら
ないことも多い。維持するのは「こ
ミニニティ」をどうつくるか、と
いうことです。人々がいてを行
てはつながらない。そこに潤滑剤
のように入らなくてはならない。こ
見せぬ清潔さをいっているが、
NGと見守つて。そのための役割
を担うには、昔の地蔵のつな
がりにあそびながら、新しいなが
加わって、新たなコミュニティを
形成する。町づくりが商店街か
も参加して、地域に根ざした仕組
みををつくるべきだ。」

命守る知恵生活の中に

も増える。地球温暖化の異常気象
の影響、雨の降り方がまったく変
わってしまった。それに社会が断
絶になつたのが重なり合つてき
た。地震だけじゃなく、マルチハ
ザードの時代を迎え、いろいろな形
で災害が日本社会襲う。」「
——物理学者の寺田尚彦はこう
いっています。文明が進めばは
むく自然の猛威による災害がその
激しさを増すよ。」「
「20世紀便利さとか豊かさを
追いつめられた機械文明の時代だつ
た。確かに豊かから崩壊するに
は必要だが、その豊かさは副
作用をもたせした。環境破壊を地
球をいじめ、あるいは効率性を追
求めるための社会の構造もいびつ
になった。」「
「都市の機能は集中せられさ
ざるほど、経済原則からつこうと機
能的な生産がある。日本全体で
握はされに産する。だから、千
どもお宅は下校するとき人通りの
少ない所を通る。本道は地価の最
も高い街のとまかに学校はない
といかない。そこに願かつて人が
流れるから。地域の人たちが主
も自守の関係がある。講堂と
かが強がり超えのの単に社会が疑
弊たちからとてことではない。」「
「家の中で衣服が火がついたら
どうすればいいのか。服を脱いで
消せつと、逆回転を促さな
る。」「
「寝るときは、枕を高くしない、
かが、床を学校で寝ている
のでも、寝知つて、日本の字
どうもは、知つて、
「命

内閣部に予もの活断層がある地震列帯は、阪神大震災
にも属取、新潟・宮城など大地震が相次いだ。こうして地震
はかつてなく、温暖化の影響もあって豪雨などによる自然災害は
いつどこで起きてもおかしな。大震をきつかけ防災に
の防災意識は高まったといわれるが、災害への備えは未だ
うろた。防災専門家らの連絡「インタビュ」を通じて、災害
に向き合うべきを考えてみる。【編集委員 野田聖也】

——地震の大津波、ハリケーン、雲霧、土壌、住火ははははは
などで未曽の被害に襲われ、約3000人が、高齢化社会
21世紀は、災害の世紀になるか
——「21世紀は自然災害を不慮の
事故で受け止める人がなくなるの
千一人います。」「
「これからは洪水でどまどまど

マルチハザードの時代

関西学院大学災害復興制度研究所と
朝日カルチャーセンターが共催で7月
から、市民のための防災・危機管理講
座「関西を再び大地震が襲うとき～あ
なたの備えは」を開催します。12回シリ
ーズの第1回は7月2日の開講で、講
師は室崎益輝さん。申し込みは朝日カ
ルチャーセンター(06・6222・5222)へ。